
IS 銀の姫とサーヴァント

黒翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 銀の姫とサーヴァント

【Zコード】

Z2508Z

【作者名】

黒翼

【あらすじ】

銀の姫は幼き頃の白き騎士に救われた。だが、無常にも別れが訪れてしまった。そして、かつてとは変わり果てた世界で再開する。設定が甘かつたり、チートだつたりします。そして、サーヴァントたちはFateとは違う性格だつたりします。それらが嫌な方はバックで。

プロローグ（前書き）

また始めてしまった……。

プロローグ

それはずっと昔のことだった。

「一緒に遊ぼうよー。」

「え？」

私は元々髪の色は黒い、ブラウンだった。
しかし、あるとき突然髪の色が変色し、銀髪になってしまった。
その所為か、一緒に遊んでいた子達が奇妙がつて私から離れていった。

だから、私は一人でいた。

そんな私に声を掛けてくれてのが彼だった。

「君も一緒に遊ぼうよー。」

「え、でも……」

「遊ぼう、ね？」

そんな私に明るい笑顔で話しかけてくれた。
私は嬉しかった。

「う、うんー。」

一人だった私に、寂しかった私に声を掛けてくれた、彼が好きだった。

でも、私の両親は、あまりにも過保護だった。

幼稚園でこれだ、小学校ではもつと酷いかもしない。

そういう考えを持つてしまつたいたが故に、私と海外に移住することになった。

実家のあるドイツに行くことになってしまったのだ。

「一君……」

「ウリコアちゃん、また会おうねー」

「う、うん、また……。私のこと、忘れないでね……？」

「もちろんー、絶対に忘れないー」

「またね、一君。お姉さんとも会つておこへね

「うんー」

これが、私と彼の別れだった。

『世界で唯一のIIS操縦者・織斑一夏』

実家の城（誤字在らず）でテレビを見ていて、私『ウリアスフィール・フォン・アインツベルン』は果然とした。

祖父の命令でIIS学園に行くことが決まっていた私は運命を感じた。彼の姉は一年ほどドイツ軍に來ていたため、再開したときは驚かれた。

彼女は私の立場に驚いた。

私は、ドイツのみならず、様々な国に大きな権力を持つアインツベルン家の次期当主で、アインツベルンの企業の企業代表操縦者になっていた。

元々、アインツベルンは貴族だった。

それ以外に、鍊金術が使える。

私も使えるが、流石に治癒まではすることができない。

「一君、覚えているかな……」

『彼がウリアスフィールの言つていた人ですか』

「うん。 私の恩人で、私の初恋の相手。 今もそれは続いているんだけどね」

『写真で見る感じはいい男だな』

「幼稚園のころは凄く優しくて、明るい人だったよ」

『それは今でも変わらぬといいがな』

『きっと一君は今でもいい人だよ』

『そつであると願いましょ』

「うん。 早く会いたいな……」

私は、早くE.S学園に入学したい、早く一君に会いたい、そういう欲求が生まれてきた。

「全員揃つてますねー。 それじゃあUHRを始めますよー」

『子供が無理して大人の服を着ました』的な不自然さを持つていてる。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願ひしますね」

「…………」

誰も答えません。

原因は、ここにいる唯一の男性で、私の初恋の相手の織斑一夏。唯一の男性であるが故に、クラスの視線は全て彼に向けられている。私も見ているんですけどね、だって一君とつても格好よくなってるんだもの。

「じゃ、じゃあ血口紹介をお願いします。 えっと、出席番号順で」

あ、私ですね。

「ウリアスファイール・フォン・アインツベルンです。 よろしくお願いします」

「私に気づいてくれるかな？」

「君は今この空気に飲まれちゃってるから気づかないかな？」
後で話しかければいいか

Side～一夏～

キツイ、これは想像以上にキツイ！

男が俺だけってこれだけ視線を集めるものだな。

「……くん。織斑一夏君？」

「は、はいっ！？」

いきなり大声で名前を呼ばれたので思わず声が裏返ってしまった。案の定、くすくすと笑い声が聞こえてきた。

「あつ、あの、お、大声出しちゃって』めんなさい。お、怒つてる？ 怒つてるかな？『ゴメンね、ゴメンね！ でもね、あのね、自己紹介』あ』から始まつて今『お』の織斑君なんだよね。だからね、『』、ゴメンね？ 自己紹介してくれるかな？ だ、駄目かな？」

山田先生はペーぺーと頭を下げる。

この人、本当に先生なのだろうか？

「いや、あの、そんなに謝らなくとも……つていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当ですか？ 本当ですね？ や、約束ですよ。絶対です
よー」

俺の手をとり詰め寄る先生。
凄い注目されるんですけど……。
うわ、すっげー視線。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願ひします」

『もっと喋つてよ』と言つ空氣が流れている。
だが、話すことだが何も無い。

しばらく考えたが何も無い。

助けを求めて幼馴染の篠を見るが、目をそらされた。
あ、あれ？

あの子、もしかして……。
いや、まさかな。

つと自己紹介の最中だつたな。

「……以上です」

女子数名がずつこけるが、俺ことひこまどりもいい。
彼女があの子なのかが気になって仕方が無い。
む！ 殺氣！

パシッ！

この攻撃の鋭さ、間違いない！

「ほ、防ぐか」

黒スーツにタイトスカート、すらりとした長身、狼を思わせる鋭い
つり目。

間違いない。

俺の実姉なのだが、職業不詳で月一、一回しか家に帰つてこないの
だ。
だけどなんでここに？

「……やつぱり千冬姉だったか」

パシッ！

「織斑先生と呼べ。 馬鹿者」

もう一度出席簿が振り下ろされるが、それをも防ぐ。俺だって鍛えているんだ、それがこんなところで役立つとは。

「あ、織斑先生、もう会議は終わられたのですか？」

「ああ、山田君、クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

俺は聞いた事のない優しい声だ。

「い、いえっ。 副担任としてこれくらいはしないと……」

山田先生は若干熱っぽくなつた。

そつちの氣があるわけではないよな？

「諸君、私が織斑千冬だ。 これから一年間で君達を使い物にするのが私の仕事だ。 私の言つ事はよく聞き、よく理解しろ。 理解出来ない者は出来るまで指導してやる。 私の仕事は弱冠15歳を16歳までに鍛え抜くことだ。 逆らつても良いが、私の言つ事は聞け、いいな」

なんといつ暴力発言。

教師有るまじき発言だと思つぞ、我が実姉織斑千冬よ。

……何のキャラだ、コレ？

「キヤー——！ 千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園から来たんです！」北九州から！

「あの千冬様にご指導いただけるなんて、嬉しいです！」

「私、お姉様の為なら死ねます！」

キヤアキヤア騒ぐ女子達を、千冬姉はついついしおんな顔で見てい
る。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者共が集まるものだ。感心させる
られる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させて
るのか？」

人気は買えないんだから、もうちょっと優しくしようぜ？

「さやあああああつ！ お姉様！ もつと叱つて！ 騙つてー。」

「でも今は優しくて」「少しつかづかしい

「そしてつけあからないように戯をして～！」

「」のクラスは変態さんが多いのか？

ノーマルだよな？ ノーマルもいるといつてくれー

「で？ おまえは挨拶も満足にできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は

パシッ！

本日3度目。

俺、止めてなかつたらもう脳細胞が一万五千個死んでるぞ？

「織斑先生と呼べ」

「了解です、織斑先生」

俺と千冬姉が姉弟なのがばれた。

「え……？ 織斑君って、あの千冬様の弟……？」

「それじゃ世界で男で『HIS』が使えるって言つのもそれが関係して……」

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあっ」

最後のは放つておいつ。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれから基礎知識を半月で覚えてもらひ。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

なんという鬼教官だ。

「席に着け、馬鹿者」

馬鹿で結構。

Side～ウリア～

Side～ウリア～

一夏、強くなつてゐるみたい。

あの千冬さんの攻撃をああも防ぐなんて。

^ ますます惚れましたか？^

^ うん。 真で見るよりもずっと格好いいしね

^ その恋が実るといいな

^ うん。 覚えているかな？^

あ、彼らはアインツベルンが創つた私の専用機『サーヴァント』の
人格たち。

アインツベルンが過去に召喚した英靈たちらしい。
神話に出てきた英靈たちの力を貸してもらひ「」とができるのが、私
のI.Sの強みなんだ。

キーンゴーンカーンゴーン。

あ、一時間目が終わつた。

一君はダウンしていた。

大丈夫かな？

^ 主よ、話しかけなくともいいのか？^

^ あ、そうだつた^

私は席を立ち、一君の席に行く。

「ちょっとこいかな？」

私以外にもう一人、一君に話しかけようとしていた子がいたけど、私は確かめずにはいられない。

「はい？ ……（ガタツ！）」

一君は私を見ると驚いて席を立つた。
周りは何事かと見てるけど、気にしない。

「覚えてる……かな？」

「ウリア、なのか……？」

「うん。 久しぶりだね、一君」

「本当に、ウリア……なんだな？」

「そうだよ。 幼稚園のころに別れた、ウリアスフィール・フォン・
AINZBERGだよ」

「久しぶり、ウリア。 僕、ずっと覚えていたぞ。 ウリアと別れ
てから十年間、ずっと」

「うん……私もずっと忘れなかつた……」

よかつた、一君が私のことを覚えていてくれて……。
涙が出てきたよ。

「お、おい、どうした？」

「嬉しくて涙が……」

「そんなに嬉しいのか？ 僕も嬉しいけど……」

だって私の好きな人なんだんもん！

覚えてもらえて嬉しくないわけないでしょー！

「おめでとうございます、ウリアスフィールく

「まだ早いぞ、アルトリアよ。 それはウリアの恋が実つてから言うべき台詞だとは思わないかね？」

「ほひ、わかつてゐるではないかく

「イスカンダル、私は鈍感であったが、それは過去の話だぞ。 それに、流石にそれくらいは俺でもわかるく

「一番新しい英靈が言ひではないかく

「無駄な言い争いをするな。 我らは主に仕えるだけであらひく

「間違つていいぞ、ディルムッシュよ。 余は仕えてはおらぬ。 この契約は余たちの氣分次第だく

「イスカンダルの言ひとおりだ。 現にギルガメッシュは現界しているが、力を貸すことは滅多にないく

「やういえばそうだつたなく

このエスに宿る英靈たちの中で最も強い力を持つギルガメッシュは、滅多なことがない（ていうか、一回くらいしか使つたことが無い）と力を貸してくれないから困る。

『^{オレ}我的宝物をそう簡単に使おうとは片腹痛い』とか言つから、ギルガメッシュはほとんど使えず仕舞い。

人類最古の英雄王はいつになつたら私にちゃんと力を貸してくれるのだろうか？

「これからもよろしくね、一君」

「ああ、よろしく。あと、一夏でいいぞ」

「今はまだ一君のほうがいいから」のまま

「そうか」

キーンゴーンカーンゴーン。

「時間みたいだから、また次の時間にね」

「おう」

私と一君の繋がりが切れて無くてよかつた。

再開（後書き）

「出した英靈たちは、なんとなくです。
後、原作読んでないから英靈たちの口調がわからない…。」

「そんなので大丈夫なんでしょう?」

「問題ないと信じている…」

「こんな駄作者ですが、応援してあげてくださいね」

「ウリアあー?」

設定（前書き）

一応投稿します。
が、設定が甘いです。

【名前】
ウリアスフィール・フォン・AINZULF

【見た目】
Fatteのアイリヒ・イリヤを足して「ド」割ったような感じ。
元々はブラウンの髪に赤い目だが、なぜか急に銀（白？）髪に変わった。

【設定】

幼稚園時代は日本にいたが、突然の髪色変化により起きた周囲の反応と、あまりにも過保護すぎた両親の所為でドイツに移住した。
AINZULF家の人間の次期当主で、AINZULFの持つ企業の企業代表でもある。

AINZULFの秘奥である鍊金術を覚えているが、治療術はまだできない。

一夏のことがずっと好きで、一途である。

【専用機名】

サーヴァント

【設定】

AINZULFが創り上げたIS。

AINZULFが呼び出した英雄たちの『英靈』たちが宿り、その英靈の気分次第で力を貸すという、変わった性質を持つ変わったIS。

元々のカラーは雪のような白で、英靈の使用した武器『宝具』も使えるが、真の力は使えない。

『宝具』の真の力を使うのは簡単で、英靈とエスを共有する」と（共有時はエスの格好が変化する）。

ただし、その英靈が拒めば使えない。

しかし、その中にもいろいろと例外が存在したりする。

【織斑一夏について】

一夏の戦闘能力は高く、剣道にて、籌では相手にならないほどに強い。

宣戰布告（前書き）

最後を一部修正しました。

(一君、どうしたのでしょうか?)

一時間目。

一君が拳動不審でいた。

^\ 内容がわからないのでは? ^

(あ、それかも)

^\ 忙り忙しの勉強をし始めたのは長くても一ヶ月前。十分頷ける

^\ 何かしらのアクシデントがあるかもしねい ^

(それだね。何かの手違いがあつて捨ててしまったのかもしませんし)

^\ まあ、今は見回さるべからずあります

(うん)

私は一夏を見回ることにした。

「先生ー。」

「はー、織斑君ー。」

「ほとんど全部わかりません」

え？

「え……。 ゼ、全部ですか……？」

一君、本当に何してたんですか？

「え、えつと……織斑君以外で、今の段階でわからないうつていう人はどれくらいいますか？」

誰も手を上げない。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パンツ！

今度は防がない一君。

自分が悪いのは自覚しているようだ。
それにも、本当に捨ててしまつたとは……。

「必読と書いてあつただろ？が馬鹿者。 あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。 いいな」

「い、いや、一週間での分厚さはちょっと……」

「やれと言つている」

「……はい。 やります」

よし、教えよう。

私は一君のためならなんでもするつもりだし、そもそも他の子なんかに一君を渡してたまるものですか。

「一君、大丈夫？」

「大丈夫じゃない。 せっぱりわかんねえ」

「それは仕方ないよ。 だつてここに来る子はちゃんと勉強してきてるんだし、ISUに全く関係の無かつたんだから、それはこれから挽回しよ？ 私も手伝つから、ね？」

あれ？

一君に皿を逸らされちゃいました。

「あ、ああ。 よりしく頼むよ」

「……おひとつと「おひとつよろしくて？」……」

「へ？」

「はい？」

声を掛けたのは黒髪ボニー・テールの子と、金髪ロールの子。
全く、一君と私の時間を邪魔しないでください。

「訊いてます？ お返事は？」

「あ、ああ。 訊いているけど……どういう用件だ？」

「まあ！ なんですの、そのお返事。 わたくしに話しかけられる
だけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんで
はないかしら？」

「悪いな。 僕、君が誰か知らないし」

「私もです」

「わたくしを知らない？ このセシリ亞・オルコットを？ イギリ
スの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを…？」

「あ、質問いいか？」

「ふん。 下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。 よろし
くてよ」

「代表候補生って、何？」

「ここまで無知でしたか……。

周りの子達がずっとこけてますよ。

「一君、代表候補生と言つのは国家代表INS操縦者の候補生のこと
だよ。 単語からもわかるよ」

「そう！ つまりエリートなのですわ！」

「君に指を指さないでください。」

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすことだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。 それはラッキーだ」

「……馬鹿にしますの？」

「あなたが幸運って言つたんじゃないですか。 私と一君が再会できたことのほうが幸運です。 はずれですわ」

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入りましたわね。 唯一男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的を感じさせるかと思つていましたけど、期待はずれですわ」

「俺に期待されても困るんだが」

「一君のことを知らない人が評価をしないでください。 そんな下らない価値観を持つてはいるから世界が歪むんです」

「なんですか？」

「貴女が偶々学年主席で、イギリスの代表候補生なだけで一君を下に見ないでください。 貴女よりも一君のほうがよっぽどか世間に

誇れます

「貴女、私を侮辱するんですの?」

「貴女が先に一君を侮辱したんじゃないですか。私は一君を知らないのに侮辱する貴女が嫌いです。これなら入試を受けておくべきでした……」

「貴女、今なんと?」

「入試を受けておけばよかつたといつてているんです。私が主席であれば、貴女を罵つてもいいですよ? 貴女が一君を罵つたようにね」

「貴女、入試を受けなかつたんですのー?」

「はい。御爺様曰く、やるだけ無駄と」

次期当主たるもの、代表候補生に負けてはいけないんです。

「あ、そういうえば一君、入試はどうでした?」

「あーあれか? IISを動かす奴だろ?」

「そうですよ」

「あれ、俺も倒したぞ」

「へえ、流石ですね」

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではなくオチじゃないのか？」

「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」

「いや、知らないけどうだら。俺も一応倒したし」

「自信過剰ですね。滑稽です」

「一応ひどいことありますわー？」

キーンゴーンカーンゴーン。

「う……！ またあとで来ますわー よくつてー？」

よくありません。

あ、そういうえば黒髪ボニー・テールはどうしたのでしょうか？

まあ、気にしなくても大丈夫でしょう。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

織斑先生が思い出したように言いました。
私は遠慮しておきました。

「クラス代表とはそのままの意味だ。 対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。 ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。 今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。 一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

「はいっ。 織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思つます！」

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？ 自薦他薦は問わんぞ」

「お、俺！？」

私も一君で賛成です。

私は出るわけには行きませんしね。

一君がクラス代表になれば、鍛えると言つて一緒にれますし。

「織斑。 席に着け、邪魔だ。 さて、他にいないのか？ いないなら締め切るぞ」

「ちよつ、ちよつと待つた！ 僕はそんなのやらな

「自薦他薦は問わないといった。 他薦されたものに拒否権などない。 選ばれた以上は覚悟をしろ」

「い、いやでも

「

バンッ！

「待つてください！ 納得がいきませんわ！」

……また貴女ですか。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリ亞・オルセットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

……。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。 それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までE.S.技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

……。

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

貴女がトップ、ね……。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけない自体、わたくしにとつて耐え難い苦痛で」

「

「イギリスだつて大してお国自慢ないだろ。 世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「ただの古こだけの国に何があるんですか？」

「君が怒るのはわかります。
ですが、私も我慢なりません。」

「あ、あ、あ、あなたがた！　わたくしの祖国を侮辱しますのー？」

「先に日本を侮辱したのは貴女ですよ。私はこの国が好きなんです。『もし』、一君の侮辱をもする貴女は『氣に入らない』

「あ、あなた、一度までなり『一度』までも……」

「そもそも、日本で暮らすのが苦痛ならば國に帰ればいいではないですか。誰も貴女を止めませんよ？」

「け、決闘ですわ！」

「いいでしょ。　貴女のその血信、粉々にしてあげます」

「ウリアスファイールが怒っています……」

「ほつ、ひほつ、面白そつだな」

「ギルガメッシュ！？」

「ここまで切れたのは中々無いではないか。　あの雑種がどのようにしてウリアにせしられるか、見物ではないか？」

「あそこまで怒っているのは初めてではあるが……」

「あのウリアが怒つてゐるのだぞ？ これ以上ない余興ではないか」

英靈たちが何か言つてますね。

「さて、ハンデはどれほど付けましょつか？」

「貴女、私をどれだけ下に見れば……！」

「オルコット、悪い」とは言わん。ハンデを付けてもらえ。お前では確實に負けるぞ。あいつはあのアインツベルンの次期当主だぞ」

「なー？」

アインツベルンは何かしらで秀でていないとならない。
私は頑張つてあらゆることを覚えましたからね。

御爺様曰く、歴代最強になれるとのこと。

「先生、勝手にばらさないでくださいよ。まあ、いいです。この際言つておきましょう。アインツベルン家次期当主兼企業代表のウリアスファイール・フォン・アインツベルンです。以後、お見知りおきを」

「では、勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。アインツベルンとオルコット、その後、その勝者と織斑の試合だ。それぞれ準備をしておくよつこ」

「俺もなのか！？」

「アインツベルンはそもそも立候補も推薦もされていない。これ

がクラス代表を決めるものだとされるな。 では、授業を始める「

(どうやってあの子を潰しましょつか……、強すぎるのは玉置ではありますね)

けないですしつ……)

「では、私ならどうかね?」

(シロウ? あ、やうですね。 投影と『壊れた幻想』ブローカン・ファンタズム なじむわざとれますね)

「それじゃ」とだ。 私なら君の壁壇を果たせると囁つがどうかね

(え? ですね。 あの子にはシロウの力を使わせてもらいますね)
わく、試合はこれまで考えたので、一筋を助けてましょ。

宣戦布告（後書き）

「ウリアは一夏のことになると人格が変わります」

「一君を侮辱するなら、それが誰であろうと許しません……」

「わあー黒いオーラが見えるよー」

Side～一夏～

放課後、俺は机の上でぐったりとしていた。ウリアに教えてもらおうとしたけど、用があるみたいで駄目だった。にしても、ここにウリアがいるなんて未だに信じられないな。昔も可愛かつたけど、もつと可愛くなつてたし……って何考へてるんだ、俺は！？

「ああ、織斑君。まだ教室にいたんですね。よかつたです」

「は、はい？」

いかんいかん。

あと少し遅かつたらもつと酷く動搖しただろ？

「えつとですね、寮の部屋割りが決まりました」

そう言って部屋番号の書かれた紙とキーを渡す山田先生。

「俺の部屋つて決まってないんじゃなかつたですか？ 前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらつて話でしたけど

「やつなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理やり変更したらしいです。政府特例もあって、とにかく寮に入れることを最優先にしたみたいですね。一ヶ月もすれば別の部屋が用意できるので、しばらく我慢してください」

「わかりました。でも、一回家に帰らないと荷物を準備できないので、もつ帰つていいですか？」

「あ、いえ、荷物なら」

「私が手配しておいてやつた。ありがたく思え」

あ一千冬姉か。

どうせ生活必需品しか持つて来てないだらうな。
やつぱ一回帰らないと駄目だな。

「生活必需品と、一応あれも持つてきておいた」

「本当か？ 千冬姉！」

パシッ！

「織斑先生と呼べ」

危ない危ない。

危うく食らうといひだつた。

「あらがとう」れこます。これで帰らなくて済む……」

あれとは、まあ木刀と真剣とかなんだが、俺が鍛えるときによつて
いるものだ。

あれがないとやり辛いんだよな。

「じゃあ、時間を見て部屋に行つてくださいね。夕食は六時から
七時、寮の一年生用食堂でとつてください。ちなみに各部屋には

シャワーもありますけど、大浴場もあります。学年」と使える時間が違いますけど……えっと織斑君達は今のところ使えません」

「え、なんですか?」

俺、風呂大好きなんだが……。

「あほかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか?」

「あー……

なるほど、そういうえば俺しか男いないんだった。

「おっ、織斑君つ、女子とお風呂はいりたいんですけど!? だつ、ダメですよー!」

「い、いや、入りたくないです」

ウリアとだつたら……って、何考てるんだよ、俺は!

「ええつ? 女の子に興味が無いんですか!? そ、それはそれで問題のようにな……」

「よひなじやなくて普通に問題です。それと、俺はノーマルです。

同性愛者ではありません

俺はずつとウリアが好きなんだよ。

それもあつたから、ずっと覚えていたんだ。

「えつと、それじゃ私達は会議があるので、これで。織斑君達、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くつちやダメですよ」

確かに、校舎から寮まで50メートルくらいしかなかつたはずだ。
ビリやれば道草をくえるんだ?

「さて、部屋に行こう。……」

この女子たちの針の筵から開放されるなり、まだ部屋で他の女子一人のほうがまだマシだ、多分。

「1025……いいだな」

俺は鍵を差し込む。

あれ、開いてる?

部屋に入ると大きめのベッドが一つ並んでおり、まるでホテルの一室みたいだった。

とりあえず荷物を床に置いて、ベッドにダイブする。
すっげえもふもふしてる。

「誰かいるんですか?」

奥のほうから声が聞こえた。

「あ、同室になつた人ですか。こんな格好ですみません。私は

」

「ウリア」

シャワー室から出でてきたのは十年ぶりに再会した白銀の美少女、ウリアだつた。

そのウリアの格好は、バスタオルを一枚巻いただけであつた。

白銀の髪に白い肌が映え、とても綺麗に見えた。

「……え？」

Side～ウリア～

「……え？」

私がシャワーを浴びて出ると、一君がいた。

「い、い、一君……？」

「お、おう」

私の今の格好を思い出す。

シャワーを浴びた分で、バスタオルを一枚巻いただけ。

「ハラフ」

「わ、悪い！」

咄嗟に手で胸元を隠してうずくまる。

な
何で一君がこの部屋に
な
?」

「なんかここが俺の部屋みたいでな」

「ち、ちうなの……？」

「こ、これがその紙」

一君が顔を背けたまま紙を見せてくれる。紙には1025と書いてあつた。

「…………本当みたい…………」

「お、俺はどうすればいい?」

「そ、そのままお願い！」

「わ、わかつた！」

私は急いでシャワー室に入り、手早く着替える。

「み、見られちゃつた……。まだ心臓バクバクだよお……」「

いくら好きな人と言えど、全く予想してなかつたのでビックリしてしまつた。

「ふう……よしつー！」

私は深呼吸をしてからシャワー室を出る。

「もういいよ」

「お、おう」

「え、えっと、その……」

何を話したらいいのかな……。

「久しぶり、ウリア」

「あ、うん、久しぶり。十年ぶりだね」

「今まで何してたんだ?」

「ドイツの方の学校に行ってたんだ。 実家を継ぐためにもうやつてたよ」

「へえ、やうなんだ」

「一君は？」

「俺はひたすらに鍛えていたな」

「みたいだね。 千冬さんの攻撃を何度も防いでいたからわかつた
よ」

普通避けるのも防ぐのも無理だと思つただよね。

「わついえば、君、あの黒髪ボーテールの女の子と知り合って？」

「もしかして篠の」とか？

「篠？」

「篠ノ之篠つて言つて、小学校のときに知り合つたんだ

「篠ノ之？ 篠ノ之つてあの篠ノ之？」

「そうだぜ。 篠は篠ノ之東さんの妹なんだ」

「あの人の妹ですか」

「知つてゐるのか？」

「なんどか実家に来たことがあるんです」

「マジかよ。 の人、今どこにいるかわからないんだよな」

ISを開発した篠ノ之東博士は現在行方不明なんですけど、なぜか
実家に来るんですね。

ふと気づいたら侵入されたこともありますし。

「あ、あの……一樹」

「ん? なんだ?」

「一樹って、付き合つてゐる人か、好きな人つてありますか?」

「ずっと気になつていたんです。」

「ふつ! い、こきなり何を言つんだ! 」

「気になつたんです! 十年の間、やつてつた子がいてもおかしくないでし……」

「……泣き合つてゐる子はこないけど、好きな子ならこるよ」

「……そり、ですか……」

やつぱりいたんですか……。
ちよつと残念です……。
でも、その分頑張らないと!」

「あやつ! い、一君?」

「君に抱き寄せられました。
な、ななんで! ?」

「俺が好きなのはお前だよ、ウソア」

「……え? 今、なんて……?」

「俺が好きなのはお前なんだ。ウリアと別れてからの十年間、ずっとお前のことが好きだった」

「君は私のことが、好き？」

十年前からずっと？

「お、おこ、どうしたんだ？ もしかして、嫌だつたか？ そうだよな、好きでもない男に抱き寄せられたら泣きたくもなるよな……」

私の目からは自然と涙が溢れてきていた。

「ち、違うよ、一君。嬉しいんだよ」

「う、嬉しい？」

「私も、ずっと一君のことが好きだつたんだ。そしたら一君が……」

……

「そうか……、よかつたあ。嫌われたんじゃないかつて思つて冷や冷やしたぜ」

「でも、私でいいの？ 十年ぶりなんだよ？」

「当たり前だ。そういうウリアだつて十年ぶりじゃないか。本当に俺なんかでいいのか？」

「一君は私の恩人なんだよ？ 一人ぼっちだつた私を救つてくれたんだよ？ 忘れたくても忘れられないよ」

「そうか。あの時はそんなつもりなかつたんだけどな」

「一君にそんな気がなくても、私にとつてはとつても嬉しかったことなんだよ。だから今までずっと好きだつたんだよ」

「そうだったのか。ありがとう、俺なんかをずっと好きでいてくれて。そして、これからよろしくな、ウリア」

一 雨.....二 や、一 夏」
「一 ひる.....二 や、一 夏」

一夏つて呼ぶときは思いが伝わったときつて決めてたんだ。

「ねえ、一夏」

「アーティスト」

私は一夏にキスをする。

「私のファーストキスだよ」

「俺もだ」

英靈たちも祝つてくれた。

今日も→→明日も

同居（後書き）

「一夏とウコア、あいつとくつつかちゃこました」

「一夏と恋人、えへへ……」

「若干ウコアが壊れましたね」

勉強（前書き）

前話の『宣戦布告』の最後を修正しました。

Side～ウリア～

晴れて一夏と恋人同士になれた次の日。
朝の食堂で一緒に朝食を取っている。

「ねえねえ、彼が噂の男子だつて～」

「なんでも千冬お姉様の弟らしいわよ

「えー、姉弟揃ってJS操縦者かあ。 やつぱり彼も強いのかな?」

やつぱりここでは男である一夏は田立ちますね。
ここぞと話の話題にされます。

「一夏、隣いいか?」

「ウリア、別にいいよな?」

一夏が私を気遣ってくれるのは嬉しいですね。
篠ノ之さんはムツとしてましたけど。

「構いませんよ」

「……では、失礼する」

ムツとしたまま篠ノ之さんは席に着く。

「……一夏、この女は誰だ? やけに親しそうだが……」

あ、もしかして「」の子、「」に惚れているんでしょうか？

「ウリアか？ 前に言つたのを覚えてないか？ 幼稚園のときご別
れた初恋の人だつて」

「一夏、私のことを言つてたりしてたんですね。

「ウリアスフイール・フォン・アインツベルンドす。 よろしくお
ねがいしますね、篠ノ之篠さん」

「なぜ名前を？」

「一夏に覚えてもらいました」

「せうか。 篠ノ之篠だ。 ジウルジウル

手を出されたので握手をします。

「一夏、食べ終わつたら昨日の続きをしますよ」

「おう。 わかった」

今は一夏の勉強が重要ですからね。

「ウリアスフイールよ」

「なんですか？」

「昨日の続きをさせない」とだ？」

「EISの勉強についてです。一夏、EISに關しては無知ですから、教えておかないといけませんからね」

「やつこつ」とか

しゃべりながらも手は止めてません。

一夏の勉強には少しでも時間が欲しいですからね。

「ウリア、俺は終わつたぞ」

「あ、少し待つてください。すぐに食べますから」

一夏のほうが早く食べ終わつてしまつました。
私のほうが量は少ないのに。
しゃべりすぎましたね。

「うわやつをまでした。では、行きますか、一夏」

「ああ。じゃ、またな、算」

「あ、ああ」

私と一夏は並んで教室に向かい、そのまま時間になるまで勉強をしました。

Side～ウリア～out

Side～一夏～

ウリアがわかりやすく教えてくれたおかげで、大分授業についていくよになつた。

たつた一日でここまで覚えるとは、ウリアにひやんとお礼しないとな。

「織斑、お前のHJDが準備までに時間がかかる

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」

「マジですか？」

「事実だ」

ウリアの勉強のおかげで、専用機の重要性を覚えたため、俺は驚いた。

- ・ISのコアは全部で467しかなく、それら全ては束さんが作ったものであり、しかもブラックボックス化されてあるため、そのため束さんしか作れない。

- ・国とか組織では振り分けられたコアで研究とかを行つている。

- ・コアはアラスカ条約により取引が禁止されている。

こんな感じ。

「本来なら専用機は国家あるいは企業に属する人間しか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的とし

て専用機が用意されることになった

「つまり、俺はモルモットってことか」

「悪く言えばな」

専用機か、どんな機体なんだろうか？

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうが……？」

女子の一人がこの空氣の中でおずおずと千冬姉に質問した。
……まあ、篠ノ之なんて名字、そうそうないしきつかはバレるよな。

「そうだ。篠ノ之はアイツの妹だ」

千冬姉、教師が個人情報をばらしてどうするんだ。

「ええええーーー！ す、すごい！ このクラス有名人の身内が二人
もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？ やっぱり天才なの！

？」

「篠ノ之さんも天才だつたりする！？ 今度工Sの操縦教えてよつ

授業中だといふに篠の元に女子が群がる。
傍から見れば面白い光景だな。

「あの人は関係ない！」

突然の大声。

「……大声を出してもない。 だが、私はあの人じゃない。 教えられるようなことは何も無い」

あれ？

篠つて束さんのこと嫌いだつけ？

「さて、授業を始めるぞ。 山田先生、号令」

「は、はいっ！」

ま、 いつか。

今はISだ、 IS。

Side～夏～out

Side～ウリア～

「安心しましたわ。 まさか訓練機で対戦しようとは思つていなかつたでしょうけど

お昼休み、 また来ましたよ、 イギリスの代表候補生。

「一夏とやるには私を倒さないといけないの、 覚えてないの？ あなたじゃあ私には勝てない」

代表候補生が相手なら、 絶対に負けない。

サーヴァントを使えば何人でも大丈夫。

量産機だとしても、十人くらいなら同時に戦つても勝てる。現に、国家代表三人と同じ機体で戦つて勝ちましたからね。あれは危なかつたんですけど。

「さて、一夏行きましょう。勉強の時間が減つてしまこます」

「おひへ、わうだな」

「お待わひなきいーー！」

「なんですか？ 一夏との時間を邪魔しないでください」

「さて、ウリア行」。勉強の時間が惜しいんだ

「あ、はい」

もう一夏もあの子のことを無視するようです。

掴まるだけ時間の無駄ですしね。

それに、食堂も混んでしまいます。

急ぎましょ。

はい到着。

やつぱり混んですね。

でも、あのまま掴まつていればもっと混んでいたでしょう。

「私は席を取つておるので、料理のまつは任せします

「わかった。何でもいいか？」

「はい。一夏と同じもので構いません」

席がなくなる前に確保しておかないと。
あ、ありました。

しばらくすると、一夏が来ました。

「はい。鯖の塩焼き定食だつて」

「ありがとうございます、一夏」

「おう。じれくらいお安い御用だ」

「ねえ。君つて噂の子でしょ？」

三年生の女子生徒が話しかけてきた。

「はあ、たぶん」

「代表候補生の子か企業代表の子と勝負するって聞いたんだけど、
ほんと？」

「はい、そうですけど」

あ、一夏の隣の席にかけた。
む、この人、私の一夏に色仕掛けでもする気？

「でも君、素人だよね？　IS稼働時間いくつくらい？」

「いくつって……一十分くらいだと思いますけど」

「それじゃあ無理よ。――って稼働時間がものをいつの。相手つて代表候補生か企業代表なんでしょ？　だったら軽く三百時間はやつてるわよ」

私は五百時間はやつてますね。

「でも、私が教えてあげよつか？　――について」

「結構です。俺にはウリアがいますから」

「そうです。一夏には私が教えますから」

「でもあなたも一年生でしょ？　私のほうが上手く教えられると思うなあ」

「大丈夫です。私はこいつ見えても企業代表ですので、知識も技量も問題ありません」

「え？　あなた、自分と戦うかもしれない相手に教えているって言うの？」

「それがなにか？　たかがこれくらいのことが問題でもあるんですか？」

同じクラスなのに、助け合わないでどうするんですか。

そもそも、自分の恋人の手助けをしないわけが無いじゃないですか。

「ですので、結構です」

「そ、そり……」

打ちひしがれて去つて行く三年生。
一夏は絶対に渡しません。

Side→ウリア→out

ウリコ・対セシコア（前書き）

そういうえば、筆が空氣ですね。

ウリア対セシリア

Side～ウリア～

月曜日。

イギリスの代表候補生との対決の日。

(シロウ、準備はいいですか?)

>大丈夫だ。君のほうこそ大丈夫なのかね?<

(問題ありません。後は戦うだけです)

>では、行くとじょうく

(ええ)

「では、私は行きますね。一夏は白式の一次移行は終えておいてくださいね。それと、私の戦いをよく見ておいてください。見るだけでも勉強になりますから」

「わかった。絶対に勝てよ」

「もちろんです。代表候補生に負けるほど、私は弱くありません

「

(行きますよ、シロウ)

>了解した<

私はサーヴァントを【英靈・H/Mヤシロウ】で展開する。

「それがウリアのISか」

「はい。これがアインツベルンが私のために用意したIS『サー
ヴァント』です。では、行ってきます」

ビットを飛び立ち、アリーナに飛ぶ。

そこには既にセシリ亞・オルコットがいた。

「来ましたか」

「はい。あなたの鼻をへし折る為に来ました」

「言いますわね……。絶対に見返して見せますわー」

「やれるものならやつてみなさい。アインツベルン家次期当主の
名において、代表候補生に負けることは赦されない。 ですので、
私が勝ちます」

『二人とも、準備はいいですか?』

「大丈夫です」

「私もです」

『では、試合開始!』

開始直後に私は『干将・莫耶』を投影する。

「中距離射撃型のわたくしに、近距離格闘装備で戦つ氣ですか……。つぐづくあなたはわたくしを馬鹿にしたいよつですわね」

「これが戦いやすいだけです。 それと、見た目に騙されていては、足元を掬われますよ」

私は両手の夫婦剣を投擲する。

「どーに投げてるんですか?」

「考えがある」とは明白でしょ!っ!」

私が投擲した夫婦剣『干将・莫耶』は互いに引き付けあい、オルコットさんの背後から接近する。

「ブローカン・ファンタズム
壊れた幻想」

剣が爆発し、オルコットさんが爆風に巻き込まれる。

「剣の形をした爆弾ですか……」

「どう受け取るかはあなたの自由です」

再び『干将・莫耶』を投影する。

「また同じ剣」

「これは爆弾でしょうか? それとも剣でしょうか?」

正解は両方。

エネルギーを籠めた剣を壊れた幻想^{ブローカン・ファンタズム}によつて爆発させたんですね。

「っく！」

惱んでますね。

「行きます！」

接近する。

オルコットさんはレーザーライフル《スター・ライトmk?》で撃つてくるが、完璧にではないですが【エミヤシロウ】の力を体現している『サーヴァント』の前では見切れます。

連續で撃たれるレーザーを「ど」とく避け、双剣で斬りかかるが、それは避けられる。

通り過ぎる際に双剣を捨てる。

「壊れた幻想^{ブローカン・ファンタズム}」

剣が爆発し、爆風で私は加速して離れ、オルコットさんはまた巻き込まれた。

「厄介な剣ですわね……」

「そもそも第三世代の兵器を出したらどうです？ ブルー・ティアーズの名前の由来である兵装を使わずに負けるつもりですか？」

「だったら、遠慮なく！」

四基の自立機動兵器『ブルー・ティアーズ』を射出する。

四基のブルー・ティアーズ 面倒なのでビットでいいですね
はオルコットさんの命令を受けて接近し、レーザーを放つてく
る。

私はそれを全て避ける。
もうわかりました。

オルコットさんはビットから撃つレーザーは全て背後、真上、真下
の常人なら反応の遅いところを狙っている。

そして、ビットを操っているときはオルコット自身が動けない。
ライフルで撃つてはいますが、その場から動けていない。

それに、データで見ましたが、後ビットは一つあるみたいですが、
それでも余裕ですね。

「なんで当たりませんのー!?」

狙いが簡単だからです。
さて、終わらせましょう。

『干将・莫耶』を投影し、投擲する。

それを移動しながら行い、アリーナには計五組の『干将・莫耶』が
舞っている。

「ブローカン・ファンタズム
壊れた幻想！」

ドオオオンッ！

先ほどまでの爆発とは桁違いの爆発が起こる。

その爆発により、四基のビットは破壊され、オルコットさんはボロ
ボロになつた。

「あれを受けてまだシールドエネルギーが残つてゐるんですか」

「……ギリギリでしたわ。ティアーズの操作を止めて動いてなければあれで負けましたわ」

あれで終わらせるつもりでしたが、動いて爆発の直撃から逃げているとは。

正直言つて、予想外でした。

「これで終わらせましょう

投影したのはただの弓と剣。

この状態で『偽・螺旋剣』を使うと大変なことになります。
だから、ただの剣を矢として放つ。
エミヤシロウの弓は百発百中。
ですから、外すわけにはいきません。

「せめて一撃でも！」

レーザーを撃つてきますが、それは避けながら矢を放つ準備を終える。

「これで終わりです」

構えた弓から放たれた矢は見事オルコットさんに当たり、シールドエネルギーが尽きた。

『試合終了。勝者 ウリアスフィール・フォン・アインツベルン』

私は、代表候補生相手に無傷で勝利した。

「アインツベルン、三十分の休憩後に織斑との試合を行つ。準備

をしておけ」

「わかりました」

三十分後ですか。

あまり休憩はいらないんですけどね。

「一夏、一次移行は終わりましたか？」

「あと少しだな」

三十分の休憩なんでしょうか。

「こじても、強いな、ウリアは」

「INのINのおかげでもありますよ。私の『サーヴァント』はかなり特殊ですから」

「わうなのか？　でも、流石だよ」

「ありがとうござります」

やつぱり、一夏といふと落ち着きます。

Side～ウリア～out

ウリア対セシリア（後書き）

「早く一夏と戦つてみたいですね」

「私は上手く書けるか自信がありません」

「一夏を格好良く書いてくださいね？」

「精一杯頑張ります」

ウリア対一夏 そして

Sides ウリアス

「織斑、アインツベルン、そろそろ時間だ」

「わかりました」

一夏のISの一次移行も終わり、私の休憩時間の三十分が終わろうとしていた。

「わざ、いい試合をしちゃうね、一夏上

「おう。勝てなくとも、矢報いるべからざりてやるた」

では、
「私だけの力で戦いましょう」

「誰の力を使うつもりなのですか？」

（今日は筆頭は使いません。セミナーと私自身の力で戦します）

英靈の力を使うには『サーヴァント』の元々の姿を変えるが、今回

「わかりました。ですが、あまり無理をなさらないように」

(わかっています)

れて、時間ですね。

「行きましょひへ、『サーヴァント』」

私を纏ひのせ、先ほどとは違い、雪のよつこ真つ白な装甲。これが『サーヴァント』の元々の姿。

「あれ？ もうきのとが違うな」

「私のヒロは特殊でして。この姿が本来の姿になります」

「やうなのか。 んじゃ、戦うか」

「やうですね」

私と一夏は一緒に飛び立ち、アリーナの上空に向かい合ひ。一夏のヒロは『白狼』。

その名の通り、純白の装甲に包まれている。

「一夏、操縦の方は大丈夫ですか？」

「まあな。 一回戦でこれだけ動かせるのも、ウリアのおかげだ」

「そうですか。 では、始めましょう」

ブザーが鳴り響き、私と一夏の試合が始まる。

ISから知れる情報から、一夏の持つ武器は、近接特化ブレード『雪片狼型』だというのがわかった。

世界最強の名を持つ千冬さんが現役時代に使っていた《雪片狼》の後

続武器。

もしも《雪片》の能力をも受け継いでいるのなら、厄介ですね。

「行きまよ、一夏…」

「来い、ウリア…」

私は両手に黒鍵を持ち、接近する。

ギィィィン…

私の黒鍵と一夏の雪片がぶつかり合ひ、

「手数では私のほうが上です。ビリビリ捌きますか?」

両手の黒鍵は合計で六本。

投擲したりも出来るため、近接戦闘しか出来ない一夏の方が不利だ。

「双剣との戦いも一応はわかつてゐる…」

「私の武器はこれだけじゃないんですよ…」

錆糸で鷹を作り上げる。

「な…?」

「驚いてはいけませんよ、一夏」

鷹を一夏に向けて飛ばす。

これは、ISを自動追尾するため、私が操作をしなくても扱える。

だから、私は鋼糸の操作に思考を使わなくて済む。

「私と鋼糸、一つの攻撃をどう捌きます？」

「ちつ！ 厄介だな」

鋼糸の鷹は独立して一夏を狙い、私自身も一夏を狙う。両手の黒鍵と一夏の雪片が幾度もぶつかり合つ。

「隙あります、一夏」

「なに！？」

鋼糸で出来た鷹が鋼糸に戻り、一夏を拘束する。

「その鋼糸は剣でもあるんです。締め付ければ締め付けるほど、シールドエネルギーは削られる。そして、私は自由に動けます」

両手の黒鍵で鋼糸を断ち切らないようにしながら切り裂く。

「ぐつ！ あつさり負けて堪るかあ！」

雪片の刀身が光を帯び、巻きついていた鋼糸を断ち切った。やはり能力も受け継いでいましたか！

私は一夏から距離を取り、黒鍵を投擲する。だが、それは避けられ、防がれる。

「やつと動ける！」

一夏が急接近してくるのを、私は新たな黒鍵を展開して迎え撃つ。

ପାତ୍ରବିରାମ

「せああああ！」

直進してくる一夏の斬撃を右手の黒鍵三本で逸らし、左手の黒鍵で一夏を斬る。

『試合終了。』
『勝者』
ウリアスフィール・フォン・アインツベ
ルン』

それで一夏のシールドエネルギーが尽き、私の勝利で終わった。

「強いな、ウリアは」

「一夏も一回皿とは思えませんでしたよ。まさか鋼糸が断ち切られると思っていませんでした」

「逆に俺は鋼糸に縛られるとは思わなかつたぜ」

「あの鋼糸は相当な強度があるんですけどね。あれが雪片の力で
すか」

「そうだ。『雪片』の特殊能力『零落白夜』の真価は『バリアー

無効化攻撃』。相手のバリア残量に関係なく、それを切り裂き本体に直接ダメージを与えることが出来る。あの鋼糸、エネルギーが籠められていたのだろう?』

「はい。あの鋼糸にはエネルギーを通させて自立追尾を可能にしました」

「零落白夜は斬る対象がエネルギーである限り、それを消滅させる。まあ、エネルギー装備に対しては最強だ」

「そんなに凄いのか」

「だが、当然欠陥もある。あれは自らのシールドエネルギーを攻撃に転化させているのだ。つまり、諸刃の剣だ」

でも、いくらエネルギーに対しては最強だとは言つても、消滅対象が零落白夜の消滅させるエネルギー以上の攻撃だつたら通用するはずです。

宝具の真名開放ならいくら零落白夜と言えど、消滅させるのは容易ではないだろう。

「なんにしても、今日はこれでおしまいだ。帰つて休め」

では、戻りますか。

「あー、アインツベルン。少し話がある」

「話ですか? わかりました。すみませんが一夏、先に戻つていてください」

「俺なら待ってるや？」

「長引くかもしれん。先に戻つておけ」

「といつことりじいです」

「わかつた。先に戻つてるからな」

一夏はピットから出て行き、いつの間にかここには私と千冬さんじかいなくなつた。

「ウリア」

名前？

プライベートみたいですね。

「もしかして、一夏とのことですか？」

「ああ。私はお前と一夏の行動を見ていた。お前ら、付き合つているのか？」

「……はい。私と一夏は付き合つています」

「私はお前の気持ちも、一夏の気持ちも知つてはいた」

千冬さんがドイツ軍で教官をしていたとき、何度かあつて話をしました。

そのときこいつたんですね。

「正直言つて、私はお前たちが繋がつてくれて嬉しい。だがな、

一夏は私の大事な家族だ

「それはわかつています」

一夏と千冬さんは両親に捨てられてしまつていて。
だから、一夏の唯一の家族なのだ。

「私を認めさせてみる」

「……どのようにして?」

「N.I.JはH.S学園だ。 言いたいことがわかるか?」

「つまり、H.Sで戦えと?」

「そうだ。 お前の腕とそのH.Sの相性は世界最高だ。 その力を
持つてして、私を倒して見せろ」

私が『サーヴァント』を使ったときのH.Sの適正値のランクはS
Sランク。

つまり、過去最高のSランク保持者である、モンド・グロッソのガ
アルキリー、ブリュンヒルデ以上のランクである。

H.Sの適正値に関しては、全世界の頂点である。
ましてや、『サーヴァント』は伝説の英雄たちの力をも扱うH.S。
英靈たちの力を貸してもらう以上、負けるわけにはいかない。

「わかりました。 日時はいつでしょつか?」

「今週の日曜日だ。 私とて準備が必要だ」

「日曜日ですね？ わかりました

「私が伝えたかったことは以上だ。もう戻つていいだ

「失礼します」

私は千冬さんに一礼し、ペットを後にした。

相手は千冬さん。

現役時代よりも劣っていると言つても、世界最強であるのは変わらない。

でも、一夏との交際を認めてもらつたため、絶対に負けるわけにはいかない！

Side～ウリア～out

ウリア対一夏 そして……（後書き）

「オリジナルの英靈を出そうかと考えています」

「オリジナルの英靈及びに宝具のアイデイアがあれば、教えてください」と私も作者も助かります」

「必ず出すとは言えませんが、アイデイアがあれば教えてください」

「「お願いします」」

クラス代表決定

Sidē～ウリア～

「オルコットさん、一夏との試合のあつた次の日のS.H.R。

「では、一年一組代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繫がりでいい感じですね！」

山田先生は嬉々としてしゃべっているが、一夏だけは暗かった。

「先生、質問です」

「はい、織斑君」

「俺は昨日の試合、ウリアに負けたんですが、なぜクラス代表になつているんでしょうか？」

「それは

「私はオルコットさんと戦いはしましたが、私は誰からの推薦もありませんでしたし、私も立候補はしてないのでクラス代表にはなれないんです」

「しかも、アインツベルンは恐らく学園最強だ。そんな奴がクラス代表になつてみると、他のクラスのやる気が起らる分けなかつ」

織斑先生が補足説明をしてくれました。

「そういうことらしいです。で、私は全ての試合で勝つているので、私が決めさせてもらいました」

「何で俺にしたんだよ！？ オルコットだつていただろうが！」

「他国をああも簡単に侮辱するような人がクラス代表に相応しいはずないじゃないですか。それに、クラス代表になればISの操縦は他よりも伸びやすいはずですので、一夏にさせてもらいました」

一夏は他よりもスタートが遅い分、少しでも経験が積めたほうがいいんです。

「あ、あのっ！」

声をしたまゝに向くと、オルコットさんが立ち上がっていた。

「一Jの度は織斑一夏さんや日本のことを侮辱してしまい、申し訳ありませんでした！」

頭を下げて謝つてきました。

「知りもしないのに男だからといつ理由で、侮辱してしまい申し訳ありませんでした！」

「いや、俺はあんまり気にしてないから。だから頭上げてくれないか？」

「そうです。あの時は私も言い過ぎました。これから改めてくればそれで構いません」

「一夏のことを悔辱されたからと言つて、やり過ぎてしまつました。ですが、後悔はしません。

「しかし… それではわたくしの気が済みませんわ…」

「では、一夏と模擬戦をしてください。私の上は中・遠距離と言つものが少ないのでから」

全くないわけではないんですが、多くが近距離戦闘ですからね。マシンガンとか、レーザーと言つた射撃武器はほとんどありません。」

「一夏もそれでいいですかね？」

「ウリアがいいのなら、俺も構わないぞ」

「……わかりましたわ。 その役目、務めさせていただきます

」これで一件落着ですね。

「クラス代表は織斑一夏。 依存はないな

はーい、と一夏を除くクラスメイトが返事をした。

一夏、私も手伝いますからそんなに落ち込まないでください。

そして日曜日。

私と千冬さんの試合の日になつた。

「来たか、ウリア」

「はい。一夏との交際、認めさせてみせます

『ヒュ』での試合を見る者はいない。私も全力が出せる

「それは私も同じことです。『サーヴァント』の真価を見せてあげます」

今回は英靈たちの力を存分に使うつもりです。真名開放を使うために設定しなおしたりもしました。

「束に頼んでおいて正解だつたな

「束さんですか？」

「あいつを知つているのか」

「はい。何度か家のほうに来てますし、それにちよくちよく来て

ますか？」

「私を呼んだ〜？」

なぜかここにいる束さん。

それより、相変わらずの変な格好ですね。

機械的なウサミミをつけた、一人不思議な国のアリス的な服装です。それにしても、本当に

「「なんでここにいる（んですか）？」」

千冬さんも疑問のようです。

「酷い〜！ 折角最終チェックしに来たのに〜！」

「やうか。 では、早く頼むぞ」

「任せなさい〜！ この束さんに掛かればよければいいだ〜！」

千冬さんが渡した待機状態のHISのコンソールを開き、高速でチックをし始める束さん。

相変わらずふざけているのに頭はいいですね。

一週回って馬鹿でもありますが。

「ねえウーハやん。 今酷いこと考えなかつた？」

なんでわかつたんでしょう？
エスパーですか？

「……氣のせいです

「今のは何！？」

「相変わらず滅茶苦茶な人だと改めて実感しただけです」

「それって褒めてるの？ それとも貶してるの？」

「両方です」

「酷いっ！」

「そんな会話をしながらも作業のペースは変わらない。本当に頭はいいですね。」

流石自称天才。

「お、ウリア。 いないと思つたりこんなどこにいたのか」

「い、一夏！？ なんでここに…？」

「白式がここだつて教えてくれた」

「おっ！ 久しいね、いつくん！」

「束さん！？ なんでここに…？」

一夏が驚くのも無理はありませんね。
だつてこの人大絶賛指名手配中の人ですからね。

「ちーちゃんに呼ばれたからだよ。 ウーちゃんと戦うからって」

一夏には黙っていたんですけどね。
ぱうそれぢやいました。

Side～カラ～out

クラス代表決定（後書き）

「次回はウリア対千冬です」

「一夏との交際を認めてもらつため、絶対に勝ちます！」

「おおっ、やる気が进つてこるー！」

「千冬さん公認のカップルになつてやるー！」

ウリア対千冬！ 交際の行方（前書き）

ウリア対千冬です。

上手く掛けてるかはわかりませんが、どうぞ。

ウリア対千冬！ 交際の行方

Side～ウリア～

「……今、なんて？」

「私とウリアが戦うんだ」

「なんで！ なんでウリアと千冬姉が戦うんだよ！」

「それは、私と一夏との交際を認めてもらつためです」

「それひどいひつ……」

「私はお前とウリアが付き合つのは嬉しい。 だがな、お前は私の唯一の家族だ。 だからこそ、私は強き者しかお前の相手には認めない」

「とこい」とらじこです」

「大丈夫なのかよ！」

「安心してください、一夏。 私は、負けるつもりはありませんから」

一夏と別れるなんて、絶対に嫌ですしね。

「……わかった。 絶対千冬姉を認めさせてくれよ」

「任せてくれたわ。」 夏の期待に応えて魅せまわ

「束、もういいか？」

「完璧だよ、ちーちやん！」

「ではやるやく、ウロコア」

「はー」

私と千冬さんは各自のヒヒを纏いつ。

私はサーヴァントを【英靈・アルトリア・ペンドラゴン】で展開する。

「それは……」

「これは私が現役時代に使っていた『暮桜』だ。 束に頼んで第三世代並のスペックに上げてもらつた」

「準備とまじの」とでしたか

「こきなり『暮桜を強化してくれ』って言われたときはびっくりしたぜー」

相手は最強であつたときの姿そのもの。一瞬の油断でも命取りですね。

「では、始めまじょー」

私と千冬さんはアリーナ上空に向かい合つ。

千冬さんの手には、一夏の《雪片式型》の元になつた刀、《雪片》
が握られている。

私は、アルトリアの武器、不可視の剣を持っている。

『二人とも、準備はいいかな～？』

「大丈夫です」

「始める」

『オッケー！ んじゃ、試合、開始つー！』

開始直後に私は千冬さんに向かつて飛ぶ。

ガギィイイン！

「見えない剣か。 厄介だな」

この剣は、『インビジブル・ニア風王結界』という宝具で剣を覆い、大気を圧縮させて光を屈折させ、剣本来の姿を隠している。

刀身が見えない分、刀剣の長さが掴めないため、剣のリーチがわからなくなっているため、相手が強くても初見の相手なら厄介だ。

「はあああ！」

「くつー！」

「避けるではないか」

アルトリアの直感は未来予知にも近い危機を察知するので、アルト

リアの状態だと、私自身もそれなりに直感が働いている。
流石に未来予知とまでは行かないが、この直感はとても助かっている。

「さて、その剣の姿を見せてもらおうつか！」

「…」

雪片の刀身が光っている。
あれは『零落白夜』！
まずい！

「逃がすか！」

「くつ！」

イグニッション・ブースト
瞬時加速で急接近してきたため、『零落白夜』を不可視の剣で防ぐ。
そして、『零落白夜』のエネルギー無効化により、『風王結界』の
風邪が断ち切られ、刀身があらわになる。

私の持つ剣は、黄金に輝き、雪片とぶつかり合っている。

「その剣の長さは見切った。これで惑わされずに済む」

まずいですね……。

千冬さんの剣の腕は達人級で、なおかつIOS操縦者の頂点に立つている人だ。

まだ真名開放がありますが、それでも私が不利です。

› 大丈夫です。落ち着いてやれば、勝機はありますく

(やうですね。弱気になつていたら、認めてもらひたるものも認められません！)

^ その意氣です ^

(行きますよ、アルトリア。私たちの力、見せてあげましょうー。)

^ はいー ^

勝つには真名開放の瞬間を見定めなければなりません。

「！ つふ、いい眼だ。 来い、ウリア！」

「はいー！ これからが本当の戦いですー。」

再び互いの得物でぶつかり合ひ。

“アレ”を放つには一瞬でも時間が必要になる。その時間を作る手はある。

だけど、それをやる隙がない。

隙がないなら、自分の手で作ればいい。

「隙だらけだー。」

「いいえ、それは貴女の隙です」

「なにー？」

私は、自ら隙を作りそこへ攻撃を誘導させたのだ。
だからこそ、反応も出来るし、次への一手に繋げれるー。

「『ストライク・ヒア
風王鉄槌』！」

剣を覆つていた風を解放し、威力の持つた暴風へと撃ち出す。

「くつ！」

『風王鉄槌』の威力をいなしたが、それでも風により飛ばされ、体勢を崩す。

生まれた大きな隙と時間。

これを逃せば、私の勝ちは無い。

この、最大のチャンスを勝利の為に！

「これが最後の攻撃です！」

不可視の剣から、膨大な光が現れる。

「『J』の攻撃は、一夏との交際を認めてもらひつ為に！
と別れない為に！ だから！」

私は光を放出する剣を頭上に上げる。

「『J』の一撃に、私たちの勝利を約束させる！」

この一撃は、私と一夏の思いを乗せた一撃。

この一撃は、私と私を助けてくれる英靈たちの一撃。

この一撃は、私たちの勝利を約束してくれる一撃！

「いいだろう！ 受けて立つ！」

千冬さんは体勢を立て直し、雪片を構える。

膨大な光による『究極の斬撃』と、あらゆるエネルギーを絶つ『究極の剣戟』がぶつかり合つ。

ウリアスフィール・フォン・アインツベルンー』

『究極』の攻撃同士の戦いは、私たちの斬撃の勝利で終わった。

「はあっ、はあっ、はあっ」

私は息も絶え絶えなんだけど、千冬さんはエクスカリバーを受けたため、気絶していた。

そのため、千冬さんは重力に従つて落下していった。

助けなきや。

だけど、身体が重くて速さが出ない。

このままじゃあ千冬さんが！

♪私にお任せを。 我が主よ♪

一瞬サーヴァントが光り、サーヴァントから放たれた光が千冬さんへと向かい、千冬さんが地面に当たる五十センチほどのところで光が晴れ、光から現れた男性が千冬さんを助けた。

「ありがとう、ディルムツド」

彼はデイルムッド・オディナ。

ケルト神話に出てくる英靈で、“輝く貌”の異名を持つ。

「主よ、彼女は私が連れて行きますので、戻りましょう

「ええ。 そうします」

私とデイルムッドは、ゆっくりとピットへと戻つていった。

「お疲れ、ウリア。 千冬姉は大丈夫なのか?」

「氣絶しているだけだ。 もうしばらくもすれば眼を覚ますはずだ」

「ありがとうございます、デイルムッド」

「では、私はこれで

デイルムッドは光り、サーヴァントへと戻つた。

「ウリア、あの人は?」

「彼は私のサーヴァントに宿る英雄の靈、英靈の一人です。 私の
IISは、彼らのおかげで装甲の変化などが起こるんです」

「だから姿が変わったのか

「そうなんです。 にしても、やりすぎてしましましたね……」

認めてもらいたい一心で、無我夢中でつい思いつきつやつてしまい

ました。

死んでしまわないよう、設定しなおして制限を掛けたのですが、まだ威力が高かったようす。

「……んつ」

「ちーちゃんー」

「束、離れり……」

束さんは千冬さん抱きついていました。

「すみません、千冬さん……」

「気にするな。 あれは事故であって、お前の所為ではない」

「しかし……」

「気にするなと書つておらうが。 まあいい。 私は書つていたとおつ、お前たちの交際を認める」

「「ー」」

「やるな、とは言わんが、避妊はしちよ。 在学中に妊娠なんて堪つたものではないからな」

「「千冬さん（千冬姉）ー？」」

絶対顔が赤いです……。

た、確かにしたいですけど……。

「ううう。 初々しいねえ
のんきな……。」

「まあ、 節度は守れよ」

「わかつてます／＼／＼」

「うー、 まだ顔が熱い……。」

「では、 私は戻る。 少し疲れた」

「私たちも戻りましょう、 一夏」

「やうだな」

「束さんも帰るよ。 じゃあ、 またね、 ちーちゃん、 いっくん、 ウ
ーちゃん!」

束さんはどこかに走り去つていった。

「改めて、 ゆうじくね、 一夏」

千冬さん公認になれた。

私の両親にも今度ちゃんと言つておかなきやね!

この日は、 私は部屋に戻つてからはぐつすり眠つた。
千冬さんとの戦いは疲れました。

ウリア対千冬！ 交際の行方（後書き）

ウリアが勝つのは予想できましたよね……。
才能が欲しい……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2508z/>

IS銀の姫とサーヴァント

2011年12月16日23時42分発行